

## 31 アメリカ女性病院による関東大震災への医療支援と日本人女性医師について

藤本 大士

日本学術振興会／京都大学大学院教育学研究科

関東大震災後、被災地では様々な救療事業が進められた。日本人医師・看護婦による活動については、鈴木淳『関東大震災——消防・医療・ボランティアから検証する』（ちくま新書、2004年）や北原糸子『関東大震災の社会史』（朝日新聞出版、2011年）などで検討されている。被災地には海外からの支援も多くおこなわれ、代表的なものにアメリカ赤十字社による支援がある。それは1927年の同愛記念病院の設立につながり、その事業内容も知られている。それに対し、同じ時期にアメリカの支援によってつくられた深川会館診療部についてはあまり知られていない。深川会館診療部は、アメリカ女性病院（American Women's Hospitals; AWH）という団体の経済的援助を受けて、アメリカ・バプテスト教会と日本人女性医師などの協力のもとに進められた医療事業であった。そこで、本報告では、AWH関係文書（Drexel University College of Medicine Archives 所蔵）やアメリカ・バプテスト教会の年報など（Yale University など所蔵）を手がかりとして、深川会館診療部がどのような事業であったのか、そして、その事業に誰が関わったのかを明らかにする。

AWHのはじまりは、1917年にアメリカ女医学会（Medical Women's National Association; MWNA）の有志が、第一次世界大戦の戦禍にあえぐ女性・子供のために、アメリカ人女性医師の海外派遣をおこなったことであった。当初の派遣先にはフランスやギリシャなどが含まれていた。

AWHが東京で医療支援をおこなうにあたって、頼りにしたのが井上トモ（1870-1960）であった。井上はメソジスト系ミッションスクールである活水学院高等科を卒業後、アメリカに渡り、医学を学んだ。1898年にクリーブランド医科大学を修了したのち、さらに医学の勉強を続け、1901年にはミシガン大学医学部を修了している。1902年頃に帰国してからは、華族女学校をはじめ、多くの女学校などで校医をつとめた。また、日本女医会では海外との連絡役をつとめた。たとえば、1919年には第一回万国女医会に日本から唯一参加している。アメリカの滞在経験が長かったこともあり、MWNAやAWHにも複数の友人・知人がいた。

AWHと井上が協力して、医療事業を実際に進めていこうとする中、とくに大きな支援をおこなったのがアメリカ・バプテスト教会であった。AWHの活動自体は特定のキリスト教の教派に基づくものではなかったものの、AWHの医師が派遣先で現地のキリスト教団体と共同することもあり、日本の場合も例外ではなかった。アメリカ・バプテスト教会でとくに重要な役割を果たしたのがアクスリング（William Axling）であった。アクスリングは1908年に同教会の宣教師として来日し、東京・神田に三崎会館を設立し、幼児教育、社会教育、診療所などの社会事業をおこなっていた。

そのような共同のもと、1924年に東京市深川区元加賀町に深川会館の建物が完成し、同年10月に正式に開館した。開館式には、駐日米大使、東京府知事、東京市長、東京市副市長、東京市および東京府それぞれの社会事業課担当者などが招待された。深川会館の1階は託児所、2階は診療所として利用され、後者はとくに深川会館診療部と呼ばれた。診療部では日本人女性医師が雇用され、患者は着実に増加していった。ただし、その事業に複数の異なるアクターが関わっていたこともあり、組織内で不和が生じることも少なくなかった。深川会館診療部に対するAWHの支援は1933年まで続いた。